

## エフタの悲劇と慰め

丸山 勉

[聖書] 士師記 11 章 29～40 節

主の霊がエフタに臨んだ。彼はギレアドとマナセを通り、更にギレアドのミツパを通り、ギレアドのミツパからアンモン人に向かって兵を進めた。エフタは主に誓いを立てて言った。「もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡してくださるなら、わたしがアンモンとの戦いから無事に帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものいたします。わたしはその者を、焼き尽くす献げ物いたします。」こうしてエフタは進んで行き、アンモン人と戦った。主は彼らをエフタの手にお渡しになった。彼はアロエルからミニトに至るまでの二十の町とアベル・ケラミムに至るまでのアンモン人を徹底的に撃ったので、アンモン人はイスラエルの人々に屈服した。エフタがミツパにある自分の家に帰ったとき、自分の娘が鼓を打ち鳴らし、踊りながら迎えに出て来た。彼女は一人娘で、彼にはほかに息子も娘もいなかった。彼はその娘を見ると、衣を引き裂いて言った。「ああ、わたしの娘よ。お前がわたしを打ちのめし、お前がわたしを苦しめる者になるとは。わたしは主の御前で口を開いてしまった。取り返しがつかない。」彼女は言った。「父上。あなたは主の御前で口を開かれました。どうか、わたしを、その口でおっしゃったとおりにしてください。主はあなたに、あなたの敵アンモン人に対して復讐させてくださったのですから。」彼女は更に言った。「わたしにこうさせていただきたいのです。二か月の間、わたしを自由にしてください。わたしは友達と共に出かけて山々をさまよひ、わたしが処女のままであることを泣き悲しみたいのです。」彼は「行くがよい」と言って、娘を二か月の間去らせた。彼女は友達と共に出かけ、山々で、処女のままであることを泣き悲しんだ。二か月が過ぎ、彼女が父のもとに帰って来ると、エフタは立てた誓いどおりに娘をささげた。彼女は男を知ることがなかったので、イスラエルに次のようなしきたりができた。来る年も来る年も、年に四日間、イスラエルの娘たちは、ギレアドの人エフタの娘の死を悼んで家を出るのである。

[序] 士師記の時代とエフタ

今日も先週に続いて士師記の 11 章が聖書箇所になっています。改めて確認致しますと、イスラエルの民はヨシュアに率いられてカナンの地に入り、そこで生活するようになりました。遊牧の民が、その土地で生きる農耕の民になっていきました。しかし、その中でまことの神への忠誠が失われ、もともとのその土地の神々を信じる偶像礼拝を平気でするようになってしまいました。生活も墮落する中で、イスラエルの民は、周りの異民族から何度も戦いを挑まれるようになりました。

危機を覚えたイスラエルの民は神様に悔い改めて叫ぶと、神様は憐れみ、イスラエルのリーダーとして、士師(さばきづかさ)と呼ばれる人を次々に起こしたのです。有名

な士師として、デボラとか、ギデオンとか、サムソンとかがおりますが、11章のギレアド人、エフタもその一人です。彼は「勇者」であったと記されています。

### [1] 神様に立てられたエフタ

このエフタは、辛酸をなめた人生を送ってきた人物です。「遊女の子」として生まれ、それゆえ財産を受け継ぐ事が出来ず、兄弟たちからは追い出され、裏社会で、ならず者の長として生きていました。

しかし、アンモン人がイスラエルを攻めてくることが分かると、ギレアドの長老はエフタの所にやってきて「私たちの指揮官になって下さい。そして勝利した暁にはギレアド全住民の頭になって頂きます」ということを言います。エフタ自身、初めは、私を追い出しておいて今頃何を言うのだ、と言いますが、結局その申し出を受けます。但し、このギレアドの長老たちとのやり取りの証人は神ご自身である、ということを確認してのことです。それはギレアドの長老たちにその約束を果たさせる事を強調したと共に、エフタ自身も、不思議な神様の導きを信じたのだと思います。

エフタはいきなりアンモン人に攻撃を仕掛けたわけではありません。12節以下を読むと、使者をアンモンの王に送り、戦わないで済むように交渉をしています。エフタは、これまでのイスラエルの歴史に精通しており、そのことを悟らせようとしたのですけれども、28節には、「アンモン人の王は、エフタが送ったこの言葉を聞こうとはしなかった」とあります。交渉は決裂してしまいました。

そこで今日の箇所、29節以下ですがこうあります。「主の霊がエフタに臨んだ。」エフタは、どこまでも、“神様に立てられた”士師なのです。つまり、主人公はエフタなのではなく、神様です。ですから、エフタは、その神様にどっしりと信頼して、神様がそのお力で勝利に導かれることを信じていれば良かったのですが、30節を見ると、神様と取り引きをするような誓いをしてしまったことが書いてあります。

「エフタは主に誓いを立てて言った。「もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡してくださるなら、わたしがアンモンとの戦いから無事に帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものといたします。わたしはその者を、焼き尽くす献げ物といたします。」」

焼き尽くす献げ物とは、燔祭、生贄とするということです。この言葉が、誓いが、悲劇を招いてしまいました。エフタは、アンモン人に勝利しました。そして家に帰ると、真っ先に戸口からエフタを迎え、鼓（つづみ＝タンバリン）の音を響かせて出てきたのは、こともあろうに、自分の一人娘だったのです。

### [2] ふたつの誤り

エフタはなぜ、このような誓いを述べてしまったのでしょうか？ここには二つの

誤りがあるように思います。まず一つは、エフタは、ここで、「〇〇ならば、神様、私はあなたに〇〇します」という、**取り引きのような誓い**をしてしまっています。これは、神様に誓っているのですから、**敬虔なことがら**かと思いがちですが、そうではないと思います。このことは、逆に言えば、「そのようにして下さらなければ困ります」と、丸で、**自分自身が神様の上に立っているかのような物言い**ではないでしょうか？もし私たちが、「神様は絶対このことをしてくれる。そうでなければ神様じゃない」と思うことがあれば、それは信仰と言えるのかどうか疑問です。それは**自分自身を神様にしていること**であり、心開いて神様に「聴いて」いないのです。

このことは、私は他人事とは思えません。今、「自分が神様の上に立っている」と言いましたけれども、私は最近そのことに気付かされ、ハッとさせられました。新約聖書の「**ヤコブの手紙**」を読んでいて、**頭をハンマーで殴られた**ような気がしたのです。それはこういう言葉です。3:1 から 5 節をお読みします。

「わたしの兄弟たち、あなたがたのうち多くの人が教師になってはなりません。わたしたち教師がほかの人たちより**厳しい裁き**を受けることになると、あなたがたは知っています。わたしたちは皆、**度々過ちを犯す**からです。言葉で過ちを犯さないなら、それは自分の全身を制御できる完全な人です。馬を御するには、口にくつわをはめれば、その体全体を意のままに動かすことができます。また、船を御覧なさい。あのように大きくて、強風に吹きまわられている船も、舵取りは、ごく小さい舵で意のままに操ります。同じように、舌は小さな器官ですが、**大言壮語**するのです。御覧なさい。どんなに小さな火でも大きい森を燃やしてしまう。舌は火です。」

士師ならぬ、牧師として立てられて、本当に間もないこの私です。**教会のお一人一人との信頼関係**をこれからじっくりと築いていきたいと思えます。自分が丸で何者であるかのような言葉を発していなかったか？誰かの思いを踏みにじるようなことをしていなかったか？

—**サタンのやり方は巧妙**です。特に、就任式前後のこういう時にこそ、**自分を低く**して、「**聖霊**」の導きだけに寄り頼んで行きたいと思わされています。

**もう一つの誤り**は、今申し上げた「**取り引きのような誓い**」とも関係することだと思えますが、エフタは、**神様が求めてもいないこと**を、言ってみれば勝手に決めてしまったのです。まことの神様は、**人間を生きのまま供え物**とすること、つまり**人身御供**のようなことを禁じておられるのです。レビ記(18:21)や申命記(12:31)など多くの箇所、それは忌むべき異教の風習であることを述べ、イスラエルの民は、**人ではなく、牛や羊などの動物を**献げ、それが神様のなだめの供え物となって罪を犯した者の罪が赦されるということを、律法の中で重要なこととして記しています。

エフタはそれを知らなかったのか、気分が高揚して、或いは、戦いを前に不安になり、神様を持ち出して大言壮語を述べてしまったのか…。いずれにしても、それ

は自分の一人娘を死なせるという結果をもたらしてしまったのです。

### [3] エフタの娘の死を忘れない群れ

今日のこの物語には、何とも言えない割り切れない気持ちが残ってしまいます。タンバリンを叩きながら、父親の凱旋を祝って出てきた一人娘。健気で、愛情が溢れている場面です。エフタは娘の姿を見て「衣を引き裂いた」と書いています。彼の苦しみの大きさはいかばかりであったかと思います。

しかし、エフタは、家の雇い人か誰かだったら良かったのでしょうか？それも受け入れ難い話です。確かに、人間を献げようとする話では、有名な創世記 22 章があります。アブラハムに、神様は、息子イサクを焼け尽くす献げ物として献げなさいとおっしゃいました。しかし、その箇所には、「神はアブラハムを試された」とあります。つまり、アブラハムは、神様の言葉に従ったのです。生ける神様の言葉に応答したのです。これは、自分の思いから誓ってしまったエフタとは対照的です。

イエス様の言葉を思い起こしたいと思います。

「一切誓いを立ててはならない。あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。」(マタイ 5:34, 37)。そうなのですね、私たちの信仰というのは、どこまでも神様のことばありき、なのです。「実に、信仰は聞くことにより、しかもキリストの言葉を聞くことによってはじまる」(ローマ 10:17) のです。主がおっしゃる以上のことを人間はしてはならないのです。私たちは、ただ、「はい。」「はい。」或いはよく聴いた上で「いいえ。」「いいえ。」と神様にお応えすればいいのですね。

しかし、本当に悲しい話ですね。エフタの娘の深い悲しみも伝わってきます。二ヶ月間友達と山に行って嘆いたとあります。しかし結局エフタは、神様への誓いと、娘自身の「神様に語ったとおりにしてください」という言葉に従って、娘を燔祭として献げます。そして、40 節にこのように記されています。

「エフタは立てた誓いどおりに娘をささげた。彼女は男を知ることがなかったので、イスラエルに次のようなしきたりができた。来る年も来る年も、年に四日間、イスラエルの娘たちは、ギレアドの人エフタの娘の死を悼んで家を出るのである。」

エフタの娘は何才だったのでしょうか？旧約聖書の中でも、特にやりきれなさを覚える物語です。けれども、この 40 節には私は慰めを感じます。イスラエルの娘たちによって、毎年毎年四日間、エフタの娘を覚える記念の時を持つようになったと言うのです。悲劇には違いないのですけれども、エフタの娘は、自分の罪のために裁かれたというのではなく、まだ少女のまま、神様に献げられる存在として、その生命を全うした。このことをいつまでも忘れずに覚えていたい、とイスラエルの娘たちは、「痛み」と「悲しみ」を共有したのですね、来る年も来る年も。

これはその後 6 年間生きたエフタ自身もとても慰められたと思います。「痛みの

共同体」が出来、毎年このことに目を背けないで集まった。サラリと書いてありますけれども、これは、とても大事な事ではないでしょうか？集まった者の中には、色々な思いがあったと思います。もちろん、深い悲しみがあったでしょうし、神様、なぜ？と訴えたいような怒りにも似た思いもあったでしょう。或いは、神様に自分を献げたエフタの娘の生きざまに、神様だけを見上げて生きる勇気をもたらした人もいたのではないのでしょうか。——「来る年も来る年も、年に四日間、イスラエルの娘たちは、ギレアドの人エフタの娘の死を悼んで家を出る」。—エフタの娘の死は確実に何かを残し、人々の心に語ったのです。

私たちの教会の「永眠者記念礼拝」、或いは「墓前礼拝」というのも、そうではないでしょうか。教会の群れが、その人の信仰を覚えているということはとても大切なことで、そこにとによって、教会の群れの皆が慰められますし、そこで信仰がリレーされていくと思うのです。

#### [4] 神様ご自身が「独り子」を献げて下さった。

先ほども申したように、旧約聖書において、人が人の代わりに献げ物となることはかたく禁じられていました。ところが、新約の時代では、時が満ちて、すべての人間の罪のゆるしのために、誰か人間が身代わりになったと言うのではなく、こともあろうに、一番あり得ないこと、神様は、神様ご自身の独り子を、贖いの供え物とされたのです！

今日の招きの聖句として読んで頂いたあの御言葉を思い起こして下さい。  
ヨハネの手紙一の 4:10 です。

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

御子とは、イエス・キリストです。この方を見るときに、私たちは、神様からどんなに愛されているかが分ります。それは、自ら神様の供え物となるために、鞭打たれながらも、血を流しながらも、神様との揺るがない契約を打ち立てるために、黙々と十字架への道を歩まれるお方です。このお方は、エフタの苦しみも、エフタの娘の命も、私たちのどのような過ちも、また不条理をも包み込んで、自らが全部十字架で負って下さっている、いえ、負って下さった方なのです。

#### [結] 闇の力のもとにはなく、解放されて生きる

士師記 11:29 の言葉、「主の霊がエフタに臨んだ」は、今、自分に当てはめて聴いてよい言葉だと思います。今日主の霊が〇〇さんに臨んだ、と、自分の名前を入れてみて下さい。本当にそうなのだと思います。私たちは今、闇の力のもとに生きているのではなく、イエス様の十字架によって、自分を誇ることから解放されて、

確かに様々な弱さを持っておりますけれども、けれども、しなやかに生きることが出来るのではないのでしょうか。

コリントの信徒への手紙二 3:17にはこのように書かれています。

**「主は霊であって、主の霊のあるところには自由がある」**(口語訳)。

お祈りを致します。

主なる神様、今朝も御言葉を通して語りかけて下さり感謝致します。

いつの間にか、自分が何者であるかのように錯覚してしまう私たちです。しかし、エフタが選ばれたのも、ただ神様の憐れみと恵みの故であることを思います時、それにも勝って、あなたは私たち一人ひとりを、主イエス様の十字架の恵みの中で、あなたの子として下さっていることを感謝致します。そして、この土の器を、あなたの手の中で練って下さって、あなたのご計画の中に、一人ひとりをそれぞれに相応しく用いて下さいます。そのことに信頼いたします。

まことの陶器師であるあなたは、この陶器である私たちを、大切に大切に造って下さいました。私たちは造られた者ですから、何ら自らを誇ることは出来ません。ただ、あなたの霊の導きに「はい」「アーメン」と従ってゆきたく思います。どうぞ、取り引きのような信仰ではなく、幼な子の心をもって従ってゆく信仰をお与え下さい。この週も、あなたが私たちに伴って下さいますように。

この世界を、また日本を憐れみ、まことの平和を来たらせて下さい。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。